

北勢四十八家といわれた三重郡

以北の中小豪族の一勢力であった

後藤家采女城は戦国時代終焉の騒乱にのまれ、多くの国人領主と共に城は滅びた。その後城は忘れ去られ、江戸時代の地誌や軍紀物にわずかの記録を残すのみとなっていた。

しかし城の記憶は伝承や地名となつて地元には伝えられた。江戸時代の末期、貝家村上品寺の住職で真宗高田派の学僧であつた松山忍成（にんじょう）は采女城を詠んだ七言絶句を残している。

桃蹊松山忍成

文政五年（1822）～明治十五年（1882）貝家町上品寺に生まれ、長じては任職として和敬寮を開設、門徒の教化にあつた。晩年は高田本山専修寺にて鑑学、学頭として教導育成にあつた。著書も多い。

松山忍成撰『采女郷八景』より

内部郷土史研究会編 昭和五十六年七月発行

藤城夜雨（采女北山）

後藤城塞尚残形 春光依舊艸青青

夜来陣陣風兼雨 雨滴酒花吊古靈

書き下し文

後藤の城塞（さい）尚形を残す、

春光舊（旧）に依（よ）つて艸（くさ）青青。

夜来陣陣、風と雨と

雨滴花に酒（さ）そぎ古靈を吊（ち）ょうす

口語訳

後藤家の築いた采女城の跡が今なおその形をとどめている。

そこには暖かな春の光が満ちて、昔のまゝに青々と茂った草叢に降り注いでいる。

昨夜より風を混えて降り続いた雨も止み、雨後の滴が咲き競っている花を洗い清めて、恨みをのんで世を去った後藤一族の霊を吊っているようだ。

註

采女郷八景は波木山、加富神社、貝家落雁、上品寺、貝家晴嵐、北小松中山、采女橋、采女北山籐城を詠んだ八編の漢詩。藤城は後藤の城の意。